北九州巡検　（正井先生）

2月28日 ～ 3月1日

2月28日より3月1日にかけて，2年生を中心に北九州巡検が行なわれた。都市村落景観，土地利用観察をはじめ，商店街における実地調査をも含むこの巡検は，まず九州の政治的中心地＝福岡よりはじめられた。この都市においてまずもって実行されたのは，その全体の展望のため，駅付近のビルの屋上にのぼることであった。九州の春のイメージからは程遠い，冷い北風と雪の吹きつける中で，この都市の地理学的，歴史的な地位についての概観をとらえる。その後，市中観察を行ないつつ，一方，商店街の存在様式をしるための，正井先生独自の方法にのっとった調査を行なった。調査後，宿泊地伊万里へ向う。

翌日は，先日と同様の調査を伊万里市内において行ない，そののち，伊万里焼の名でしられる陶器の里川内を見学する。空は，折りから，曇り，粉雪が舞い散り，何とも陰うつな空の下に煙突が非情にそびえ立ち，その地の過去の陰惨な歴史を物語っているかのようであった。見学を終え，過去から現在へ，引き戻された私達は，更に列車で，外に閉ざされた封建社会にあって，唯一の窓であった平戸へと向う。車窓の景色が，何か，はるか遠くへ来てしまったのだという。そして，日常性とはかかわりのないところに，今存在するといったような一種の解放感をあたえる。夕刻平戸に到着し，その足で，平戸市内を一巡した。夕暮の平戸は，海と，台地上に立つ教会とともに，その感慨をより一層引き起す。

巡検最後の日は，島の北部の小漁村薄香に行った。狭い道路，込み入った家並，などの漁村特有の集落形態をとるこの地においても例の調査を行なった。のどかな日あたり，おだやかな海，人の声一つしない集落は一種異様な不気味さを感じさせる。

その後私達は，薄香から解散地平戸に戻り三日間の巡検を終えたのである。

今，ここで思い出してみると，この巡検が印象と感慨にのみ終始してしまった様な感じを抱く。しかし，その中において把みとったものがあるとすれば，今後の私達の研究活動の中で，生かされ，確かめられていくだろう。　（3年　田辺保世）